

ロチェスター工科大学での留學生活が終わる。この半年間は私にとって充実したものであったと感じているが、留學当初に想定していた目標を達成できたとは思えない。自分の英語能力は確かに上達しているはずであるが、未だ改善すべき点は大きいことも間違いは無い。また、大学の授業をほとんど受けることが出来ずに終わってしまうことが心残りである。金沢工業大学で学んだ専門知識を活かす機会がまったく無かったことも、残念な点である。私が留學に掲げる意義を満たす努力はしていたが、自分が置かれた環境では、それ以上に学ぶ点が多々あった。

私が本大学に来たばかりの頃に出会った学生たちは、私が留學生向けの寮に住んでいたこともあり、留學生が非常に多かったが、そのほとんどが自然に英語を話していた。単なる意思の疎通手段としての言語ではなく、日常会話で用いる母国語のように英語を操る学生たちに、自分との非常に大きな差を感じたものである。母国語の発音が抜けない英語を話すものも何人かおり、私はそういった学生との会話にたびたび苦勞したことも事実である。しかしながら、彼らがあくまでアメリカの流儀に従って英語での会話をするのがすでにできていることには変わりは無かった。私はこういったことを学ぶには慣れるしかないと考え、寮生活はそのために役立つにはいい環境だった。同じ階に住む学生たちは皆気さくに声を掛け合い、食事や遊びには頻繁に誘ってくれたため、話す機会には事欠かなかった。

英語の語学学校での授業は、私にはあまり意義のあるものには思えなかった。予習復習や課題は自主的な学習意欲を満たしてくれたが、授業時間内は教員の話聞くか、生徒同士で話し合うということがほとんどであった。したがって、自分の実力を試すことや、英語能力試験の対策には向いているとは思えなかった。また、評価基準や指導内容が統一されておらず、自分の学習の成果を実感することがあまり無かった。さらには学期末の能力試験においても、選択形式の Michigan 以外では教員によって評価基準に違いがあったため、自分の英語能力を満足に試せないまま終わった感がある。

大学の授業を一つだけ受けることは許されていたため、また、議論形式など、英語能力を十分に要する授業を受けることは勧められなかったため、私は大学課程の授業には講義形式のものを選んで受講していた。これらを選ぶにあたって、私は日本では受講できなかったものを優先したが、それがあまりよくなかった。十分な英語能力がないまま、学習方法を満足に確立できていない科目を受けることになってしまったからである。授業では、プロジェクターやホワイトボードに掲示される情報量が少なく、教員の話に頼るところが大きかった。私にはそれが意見の伝達手段としては粗末なものに感じられ、大学の講義形式として納得がいくものではなかった。教員の意見や知識は学生に植え付けるものではないし、各学生の意見は尊重されてしるべきであるという米国大学の思想は承知していたが、それらの授業では、結局のところ授業内容の要点が知識として試されていたためである。これらの体験を通じて、私は米国大学の授業が必ずしも学生を満足させるものではないと感じると同時に、迂闊に自分の専門や興味を無視した授業を選択するものではないと実感した。

本学内での自己紹介では必ずといってよいほど専攻を尋ねられる。私は機械工学であると答え続けていたが、実際に本学でその学習をしたことがなく、また、自分が日本で身につけた学を活かす機会が遂に無かった。語学学校の授業に時間をとられたことや、他の挑戦をしたかったこともあるが、自分が体験したかった米国大学の学生になりきれなかった。

英語能力を実用的な程度にまで改善したく希望した留學であったが、ほかの事に挑戦や体験をするにつれ、留學そのものについて学ぶことや考える直すことが多く生まれた。私にとってロチェスター工科大学の授業はそれほど楽しいものではなかった。実際に嫌々ながら授業を受けている学生はたくさん居た。しかしながら、その逆も居ることは日本と変わらない。米国大学で一学生として成功するためには、自分の動機や興味を維持する努力も重要なのではないかと私は考える。